一九七一年（出典不明）

千沙随感

なれの功罪

能力開発工学センター所長　矢口（やぐち）　新（はじめ）

この頃、公害に対する関心が急に高まってきている。マスコミが騒ぎすぎるなどという人もいるけれども、そんなことはないと思う。騒ぎすぎるなどという人は、今の状態に慣れてしまって、その恐ろしさに不感症になっているのではないか。糞土の生という言葉があるが、くそ蠅は自分のきたなさを自覚しない。もし、それと同じように人間が水俣の生ということになって、それがあたりまえということになれば、それは人間の退化、滅亡につながることではないか。まさか、そんなことにはならないであろうが。

しかし、なれというのは人間にとって重要な意味をもっているようだ。この頃はミニスカートにもなれてしまって、あたりまえになっているが、三十年前なら恐らく家庭、学校でも大騒ぎになったろうし、社会問題として国会で論議されたかも知れない。現在は反対に、もしミニスカートを禁止したら、暴動が起こるかも知れない。人々は怒るだろう。

この怒るということは、なかなか重要なことをあらわしている。つまり単に理屈の上の問題でなく、もっと奥深い人間の命の問題と関係していることをあらわすのである。あるいは脳の働きの規則となっていることをあらわす。

人間は一日に三度食事する。これは人間だけが持つ習慣で、他の動物にはない。これもよく考えてみると脳の習慣になっている。腹がへると誰でも不機嫌になるが、意識して不機嫌になるのでない。知らず知らずにそうなる。三度しか食べないから食べためをするというのも脳の規則、身体の規則ができ上がっているからである。生まれたばかりの赤ん坊は、朝昼夜などということとは関係なしにおなかがすいている。子どもに三度しか食事をしないなどという習慣がつくまでには大変な時間を要する。お母さんに叱られ叱られて、そうなっていくのである。脳、身体の規則がそのようにつくられていっている。いのちのあり方といってよいかも知れない。なれというのは、そういう人間の存在の仕方をつくるのである。

食べることと反対に出す方も同じである。ヘドロのたれ流しなどということが言われるが、出すものをどう始末するかについても脳の規則ができている。なれてしまって気がつかないが、川という川、特に都市を流れる川はよごし放題である。川ばかりでない。家から出るごみも。そこらに空地があればすぐ捨てる。これが現在の人間の脳の規則である。そういう人間の脳の規則がヘドロのたれ流しを生み出すのである。集団としてたれ流しをするのである。

公害を怒るのはよいが、ただ企業のやることに感情的に反対して騒ぐばかりでは恐らく解決しまい。たれ流しという脳のなれを、一人ひとりが直していくといういのちのあり方までさかのぼる必要があろう。